

「大嫌いで苦手なもの」

鈴木和枝

私は、特に何が有った訳でもないけど「読む」「書く」ことが大嫌いで、その場から逃げていたような子どもでした。字は下手で人前で読むのも自信がありません。照れくささや緊張感もありました。

ところが、中学に入ると、国語が嫌いだなんて言っている場合ではなくなりました。今からでも間に合うだろうか…、誰に相談するでもなく考えるようになりました。その頃、父が川柳をやっていたので、見よう見真似で川柳を作っては新聞に投句するようになりました。すると、時々掲載されて、褒められました。そう言えば、これも立派な国語だ。長い文章ばかりが国語ではない。一行の中にドラマや風景や感情がこもっているではないか。次第に、俳句、川柳にはまりました。そのうち自然と字も書き、深読みもして国語の世界に入っていました。

しかし、私にはもう一つ苦手なものがありました。それは、音楽です。歌う、演奏する、楽譜を読む、どれも考えただけでも無理でした。絶対出来ないと決めていました。

ある日、孫のピアノを邪魔だなあとと思いながら叩いてみると、私の音がして嬉しくなりました。以来、早く掃除を済ませて、ピアノの前に座るようになりました。気付けば十五年間、ほぼ毎日座っています。自己流だけど、童謡や演歌など昔の歌を四十曲くらい弾きます。時には歌うことも。これは音楽とはいえないかもしれませんが、私には最高の音楽です。

何事も無理だと決めつけるのはいけませんね。